

# 〈情熱〉の語誌に関する一考察

野 口 新 一

北村透谷の評論「情熱」（明治二六年九月）は、〈情熱〉が透谷の造語であるとする説の大きな根拠となっている。このことに関しては、今日まで多くの研究がなされてきた。橋浦兵一氏は『明治の文学とことば』（昭和四六年六月評論社）の中でこの問題を取り上げて、「それは彼（注、透谷）の造語であり、以前には、日本語として存在しなかったもののように考えられる」と述べているが、やはり断言することは避けている。しかし、氏が前掲書の中で島崎藤村の回想や、『透谷全集』の勝本清一郎氏の解題、笹淵友一氏の『「文学界」とその時代（上）』および島田謹二氏の『近代比較文学』などにおける研究成果を借りながら、透谷が〈情熱〉に担わせた意味をさぐったことによって、その説は充分に説得性のある論証となっているといえよう。

〈情熱〉が透谷の造語であるか否かについては、透谷の文学性を

考えた場合重要なテーマとなる。しかし氏も取り上げたように、透谷と同時代を生きて密接な関係にあった藤村ですら「透谷以前に彼が賦与したやうな意味の情熱といふ言葉はなかつた」と述べているに過ぎないのである（『柳沢健君著『現代の詩及び詩人』小序「飯倉だより」）。このことは〈情熱〉を透谷以前にさかのぼることがいかに困難であるかを物語っているが、逆に透谷以後ならばその使用例を挙げることは容易である。

写すところは客観的にして燃ゆが如き情熱の見るべからざるも、何物かハートの奥にひそむものありて（『文学界』第九号、時文「心の闇」、明治二六年九月三〇日）

この用例などは、透谷が「情熱」を発表してから二十日ほど後のものであり、透谷以後では最も早い時期の用例である。ただし無署名

である。また次の用例においてはその字句から明らかに透谷の影響をみることができる。

朝臣は実世界に於て捉へんとしたる權威を捕り給ふことを得ず、情熱ある憤慨の敗將は終に想世界に出て、戰場を求めざるを得ざるべし（同誌第二十四号、星野天知「業平朝臣東下りの姿」、明治二十七年二月）

ここにあげた用例はどちらも『文学界』によるものであるが、これら以外にも『日本評論』や『青年文』などにその使用例がみられた。いづれにせよ、透谷が「情熱」に関してひとつの契機として位置し、以後、日本語の中に「情熱」が急速に普及していったことは確かであろう。ただし透谷が「情熱」にこめた意味をさぐるのは興味深いけれどもここでは扱わず、さらにその初出問題について考察を進めたい。

透谷は「情熱」に先立って「文界時評」（『評論』第八号、明治二十六年七月）において次のように述べている。

小羊漫言未だ精読の榮を得ず、安くんぞ蕪言を呈するを得ん。

新聞紙の恥は搔搔とすること多き世の中に、短篇の批評を纏たるこのそゞろごと、早稲田將軍にあらざして誰か能くこの勇

気あらむ。

『小羊漫言』は坪内逍遙が明治二十六年六月十九日に東京の有斐閣書房から発行したものであるが、内容は明治二十三年から二十四年にかけて主に『読売新聞』紙上に発表した評論を集めたものである。透谷の記述はおそらくこの書を読んだ直後のものであろう。なお『小羊漫言』に収められた「真喜美日本人」の中には次のような一節がある。

案ずるに氏は多血性情熱的哲学者の一人なり彼の虚靈界を重ずるの余り殆ど現実界を忘れんとし終に人間を忘れんとする冷淡、死灰の如き出世間漢にあらて虚実双界を両脚にふまえて眉間常に人間を脱却せず平等即差別を觀じて自國の真、善、美を護らんとする情熱、火の如き世間漢なり若しウラーヅラスが言へる如く情熱の語をもて詩なりといはば、若し理解力に訴ふると共にをさ／＼感情に訴ふるを科学的当代の詩歌なりといはば、若しルーソー、バルク、カーライル、エマルソンの徒をもて抒情的散文派の詩人なりといはば『真喜美日本人』の著者は正しく明治の一詩人にして而も詩人の資に富みたること他の韻語家の比にあらずといはん（中略）三宅氏が果して預言者なるか否かは彼の冷灰の僻見を脱せる情熱的君等が心に於ける此の書の影響の如何に因らん

「真喜美日本人」は明治二十四年四月一日に『読売新聞』に掲載された評論であるが、逍遙のこの用例によって少なくとも「情熱」が透谷の造語であるという説はくつがえされたことになる。しかも逍遙から透谷へという系譜も「文界時評」の記述によって明らかである。しかしながらこのことよって「情熱」が逍遙の造語であると判断することは避けて、次の用例に注目したい。

是れぞ英雄色を好むと云ひし如く其精神気力さへ平常に卓越したる坂本龍馬の如きも善にまれ悪にまれ亦其過度の感覺を免れざるは怪むに足らず況して徒らに色にのみ耽る登徒子の類にあらで偏に其武を嗜む性の相近き所より生じ来れる同感に情熱はなか／＼堪忍ぶべくもあらずして何止べしとも見えざりけり  
〔汗血千里駒〕第四齣、明治一八年一月、東京春陽堂

登下同志の面々はさなきだに慷慨悲憤の情熱進る方なきに今日  
のあたり同生同志を失ひたる両隊長が空しく己を捨て去つて先づ国家の犠牲たりし惨状を見て（同書第三十齣）

この二つの用例は坂崎紫瀾の『汗血千里駒』によるものであるが、この小説はもとと『土曜新聞』に明治十六年一月から同年九月（この間約三カ月の作者の入獄による中断を含む）にかけて連載されたものである。引用箇所は「情熱」はそれぞれ「情熱」（第八回、

『土曜新聞』明治一六年二月三日）、「情熱」（第六十一回、同、八月一四日）とみえる。したがって逍遙から八年さかのぼることになり、「情熱」が逍遙の造語でないこともまた明らかである。そしてこの場合においても透谷と逍遙の間にあったような関連性を、間接的ではあるが、逍遙と紫瀾の間においてもみることが出来る。

私が緑雨君に相識になりましたのは、はつきり覚えませぬが、明治十七年であつたかと思ひます。「中略」齋藤君が見えたのは、小説改良会と云ふものを新しく興さうと思ふ、是れには坂崎紫瀾君——自由党の名士で『汗血千里の駒』などと云ふ続き物や政治論等に筆を揮つて居つた人ですが、其人と志を合せて会を興すのだから賛成してくれと云つて見えた、それが初めてだったと思ひます。（『逍遙選集』第十二巻、故人録「齋藤緑雨（其二）」。初出は明治三十七年六月『明星』。）

逍遙が『汗血千里駒』を読んだか否かについて、逍遙のこの回想では明確にできないが、少なくとも逍遙と紫瀾が無関係でなかったことは明らかである。すると当然「情熱」は紫瀾の造語なのかという疑問が生じてくるが、そのことを論証するのは透谷以上に困難であり、もはや取り上げるべき問題でもなからうと思う。

今後の研究の一つの方向として、紫瀾から逍遙そして透谷へと続く「情熱」の系譜の中で、この言葉が「文学論の主題」（笹淵友

一、前掲書)としてどのように成長していったかを考えれば、非常に興味深いものがある。「汗血千里駒」はその完成度はさておき、あくまでも政治小説である。今日までに政治と文学を取り上げた研究は数多くあるが、改めて△情熱▽を視点としてとらえなおすことによって、政治小説の文学史的な意義も、透谷の文学そのものについても新たな側面がみえてくるような気がする。

付記「テキストは以下のものを使用した。透谷については明治文学全集29北村透谷集、「飯倉だより」は筑摩書房版藤村全集第九巻、「文学界」は日本近代文学研究所の復刻版、「汗血千里駒」の単行本は土佐史談複製叢書、同初出は高知県立図書館所蔵のマイクロフィルム、その他は文中に示したもの。なお引用に際しては、ルビを適宜省略し、変体仮名を普通の仮名に改めた。また、逍遙の「真喜美日本人」の初出掲載年月日については平田由美によった。

(昭和六十二年卒業生)

『汗血千里駒』の出版は、透谷の文学的成長の重要な契機となつた。この小説は、透谷の政治小説の代表作として、その文学的完成度を高めていく過程を示している。透谷は、この小説を通じて、政治と文学の関係を再考し、その意義を明らかにしようとした。この小説は、透谷の文学的成長の重要な契機となつた。

『汗血千里駒』の出版は、透谷の文学的成長の重要な契機となつた。この小説は、透谷の政治小説の代表作として、その文学的完成度を高めていく過程を示している。透谷は、この小説を通じて、政治と文学の関係を再考し、その意義を明らかにしようとした。この小説は、透谷の文学的成長の重要な契機となつた。

『汗血千里駒』の出版は、透谷の文学的成長の重要な契機となつた。この小説は、透谷の政治小説の代表作として、その文学的完成度を高めていく過程を示している。透谷は、この小説を通じて、政治と文学の関係を再考し、その意義を明らかにしようとした。この小説は、透谷の文学的成長の重要な契機となつた。

『汗血千里駒』の出版は、透谷の文学的成長の重要な契機となつた。この小説は、透谷の政治小説の代表作として、その文学的完成度を高めていく過程を示している。透谷は、この小説を通じて、政治と文学の関係を再考し、その意義を明らかにしようとした。この小説は、透谷の文学的成長の重要な契機となつた。